

(1)

## 日本人と小豆(一)

## ―民間説話の中の小豆―

菱川 晶子

キーワード…小豆、民間説話、小豆洗い、赤米と子供、鱈鯨入

要約…日本に伝わる民間説話を探っていくと、小豆について語っている

ものがいくつも見出される。それらの説話は小豆の扱い方によって数種に分類できるが、小豆の性質上、多くは食に関わるものとなっている。その一方で、説話の中には、人々が小豆に食べ物以上の力をみていたように感じ取れるものもある。本稿ではそのような小豆が主体となっている、あるいは小豆との結び付きが強い説話を取り上げ、日本人にとっての小豆について考察を試みた。小豆に着目した民間説話の考察は、管見の限りこれまでにはない。考察の結果、小豆は自然によってもたらされる幾種もの危険から、人間を守ってくれるものと理解されていたことがわかった。

## はじめに

日本に伝わる民間説話を探っていくと、小豆について語っているものがいくつも見出される。それらの説話は小豆の扱い方によって数種に分類できるが、小豆の性質上、多くは食に関わるものとなる。

ている。例えば、「ぼた餅」や「小豆餅」として登場するものや、小豆のつぶし方を意味する「半殺し」や「みな殺し」をめぐる笑話等が挙げられる。これらの説話の小豆は、人々の日常の中で食されていた小豆が、生活の一部として自然に語られているものと理解できる。

その一方で、説話の中には、人々が小豆に食べ物以上の何かをみていたように感じ取れるものもある。これは、動物の民俗の研究の中でも、折に触れて浮上してきた感覚である。

日本人と小豆の関係については、早くに柳田國男が注目して、祝儀の際の小豆の使用を赤米との関連で考察したものがある<sup>(1)</sup>。小豆の前に赤い米があり、それが小豆の代用になったとの考えである。この研究はその後坪井洋文に引き継がれ、赤米の民俗儀礼についての研究が進むことになった<sup>(2)</sup>。また小豆については、田辺久子の「諸国風俗問状答」等の調査研究もみられる<sup>(3)</sup>。

本稿では、これらの先行研究を念頭におきながら、日本人と小豆の関係を探る初めの対象に、民間説話を取り上げたいと思う。小豆に着目した民間説話の考察は、管見の限りこれまでにはない。小豆が主体となっている、あるいは小豆が強く人々と結びついている説話を取り上げ、日本人にとっての小豆について、考察を試みることにする。

### 一、「小豆洗い」の場合

初めに取り上げるのは、「小豆洗い」の名でも親しまれている小豆の妖怪である。具体的な例を示す。

#### 事例一、小豆洗い（島根県江津市）

川に、上がったところにね、赤い石があつてね、川の中にあるんですね、ちゃらちゃらといって言いよったんです。そこを小豆洗いだとか言つて。小豆を洗う音がする言うて。ここから旭町へ、今は道が変わりましたがね、前は悪い道を通って行きよりまして、そこを通ればいっつも小豆洗いだ言うて、その音がするとか言うて。

（田中瑩一『伝承怪異譚』<sup>(4)</sup>）

隣町へ行く時に使われていた道は、川近くにあつたのだろう。そこを通ればいっつも川上の水のあたりからちゃらちゃらという音が聞こえてくる。川中にある赤い石に水が当たつて音が出ていたようである。説明はないが、その音が小豆を洗う音に似ていたためか、小豆洗いだ、小豆洗いの音がすると言われていたのがわかる。

#### 事例二、小豆撒き（島根県邑智郡邑智村）

日和のえんさこ峠ちゅうところ、ちよつと、あつこは離れたところだけえな、あつこを晩に通りゃあ小豆撒きがおるげなけえ、晩げに遅うまで遊ぶじゃないで、たやらいふようなことは聞きよつただがな。

（田中瑩一『伝承怪異譚』<sup>(5)</sup>）

同じ島根県に伝わっている話だが、こちらでは小豆撒きと呼ばれている。また水とは関係のない、人里離れたえんさこ峠が小豆撒きの居場所となっている。名前から小豆を撒くような音を出すものと連想されるが、詳細は不明だ。子どもが遅くまで外で遊ばないように諭すための存在になっているのがわかる。岩手県にはまた、次のような話もある。

#### 事例三、あずきとき（岩手県遠野市）

旅人が山道を歩いていると、シャキ、シャキッと、小豆をとぐような音が聞こえてくるので近寄ってみると、小豆が散らばっている。旅人が歩きだすと一粒の小豆が逃げだしたので、小豆を追っていく。墓場にたどりつき、気味の悪くなった旅人が元の道をひき返すと、

小豆が追いかけてくる。旅人が一軒の空家を見つけて中に入ると、小豆をとぐ音が聞こえてくる。旅人が恐ろしくなつて布団をかぶつて寝ていると、目が百もある小豆の化け物が戸を破つて入ってくる。旅人は小豆の化け物に食われて死に、そのまわりには小豆がいっぱいころがっていた。

(遠野民話同好会編『遠野の昔話』⑥)

小豆をとぐような音を耳にした旅人が近寄ってみると、そこには幾つかの小豆が落ちていた。逃げ出した一粒の小豆を追つたためか、旅人は逆に小豆に追われる身となる。そしてついには目が百もある小豆の化け物に食われてしまったと語られている。逃げ込んだ空き家から小豆を研ぐ音が聞こえてきたとあったが、そこは「小豆とき」の出現場所だったということなのだろう。まわりに小豆がいっぱい転がっていたというその光景は、不気味な余韻を残している。

このように小豆洗いは、小豆ときや小豆撒き、小豆ときばあ、さらには小豆さらさら等の数種の名で呼ばれている。中でも小豆洗いの名称が圧倒的に多く、小豆を箆に入れて研ぐような音をたてる点が特徴となっている。水から離れたところにいる例もあったが、主として水辺にいる妖怪として伝わっている。夜間や早朝に川の近くを通ると、姿は見えないのに音だけが聞こえてくるため、音の化け物や音の怪として人々に恐れられていたようだ。

この小豆洗いの説話は、東北地方から九州までの広い範囲に分布がみられ、江戸時代から多くの文献に記される、人気のある妖怪の一つであった。図に示した『絵本百物語―桃山人夜話』⑦は、その一例である。



竹原春泉『絵本百物語―桃山人夜話』

天保12(1841)

(多田克己編『竹原春泉 絵本百物語―桃山人夜話』  
国書刊行会1997)

本書の詞書によると、谷川で小豆洗いをしていた山寺の小僧が、他の坊主に突き落とされ命を落とし、後に折々現われては小豆を洗うとある。そのため、小豆洗いの絵も小僧の姿で描かれている。新潟県上越市高田の寺に伝わる話である。

この他にも小豆洗いは川で命を落とした死者の霊だとの説話もあり、狐や狸、イタチ等の動物によるとも説かれている。その正体については人々の想像力を大いにかきたてていたようだ。関東地方の「小豆洗いましよか、人にとって食いましよか」⑧と唄う小豆洗いは、前話をも想起させる。

また一方で、小豆は祭りや晴れの日の準備に関わるものであることから、準備行動や印象の記憶が妖怪化したとの考えもある⑨。神を迎え祀る時の身の引き締まるような緊張感、恐ろしいものに対する時の恐怖の感情にたやすく置き換えられるというのである。

神迎えの前の緊張と慌ただしい空気の中で、小豆を洗うシャキシャキという音が、水辺という境界と結びついて不可思議な存在を生み出したのだらう。その背後には、小豆は一年の中でも特定のハレの日に調理するものだという人々の認識があることがわかる。

## 二、「赤米と子供」の場合

小豆には、人々の苦しい暮らしぶりや生活の格差を伝える話もある。関敬吾の『日本昔話大成』<sup>(10)</sup>で「赤米の悲劇」として分類される本話は、『日本昔話事典』<sup>(11)</sup>では「赤米と子供」の話名で取り上げられている。内容をみよう。

### 事例四、南京米（静岡県東伊豆町）

昔は南京米<sup>なんきんまい</sup>っていう赤い米を食べた。そうすると、金持の家で、いっぱいね、小豆をこしらえて干していた。その家で小豆を盗まれた。貧乏人が盗んだなと思うって、疑ぐるわけだ。そうすると貧乏人は、

「俺や貧乏しても、人の物に手は触れない」って。金持が五つの子どもに、

「お前は赤いご飯食べるか」って言ったら、

「赤ご飯食べる」って言ったから、てっきり（きつと）小豆のご飯食べると思っていた。貧乏人は、

「五つの罪はよもあらじ。それじゃこの子の腹をたち割ってすつきりしましょう」って切ったら、小豆は何にもなくて、南京米が出て来た。

（鈴木暹編『伊豆昔話集』<sup>(12)</sup>）

金持ちがたくさんの小豆を干していたところ、何者かによって盗まれる。貧乏人を疑った金持ちが訪ねて行くと、人の物には手を触れないと貧乏人が返答する。金持ちがその家の五歳の子供に「お前は赤いご飯食べるか」と尋ねたところ、子供は「赤ご飯食べる」と答える。金持ちに誤解されたと感じた貧乏人は、それなら証明しようと言って自分の子の腹を立割って、赤いご飯が小豆ではないことを示す。子の腹から出てきたのは、南京米という赤い米であった。同様の話は各地に伝わる。

### 事例五、赤いご飯（長野県小県郡）

諏訪の或お大尽の庭においた小豆がなくなった。大尽は大層こうが煮えて近所の貧乏人に疑をかけた。丁度其貧乏人の子供の五歳になるのが遊びに来た。大尽は、

「今日お前はどんなご飯をたべたか」ときいた。すると子供は、

「赤い飯たいてもらった」と答えた。大尽はてっきり盗人は此子供の親だと思いこんで其家へ怒鳴りこんだ。

「いや決して盗みはしない」

「でも子供がちゃんと言ったのに間違いはあるまい」

「いや小豆の飯など決してたかない」

「それでもお前の子供ががんぜん言っている」

「それでは此子を殺して腹の中を見てくれる、私あ一人の子供殺しても無実の罪は背負いたくはない」。証拠見せてやろうと遂其子を殺して腹を割いて中を見ると、赤い飯であったが小海老の飯であった。

それでとうとう盗人の汚名は清められたが罪科のない一人息子をなくした罪亡しに西国巡礼に出かけ、道々、「五つの罪はよもあらず六波羅堂へ参る身なれば」と謡いながら此子の往生を弔った。

（小山真夫『小県郡民譚集』<sup>(13)</sup>）



諏訪のお大尽が庭に干しておいた小豆を盗まれ、近所に住む貧乏人に疑念を抱いていたところ、その家の五歳になる子供が遊びにくる。前話同様に子供に尋ねて赤い飯のことを聞いたお大尽は、家に怒鳴り込んで貧乏人に問いたです。無実を晴らすために殺された子の腹には赤い小エビの飯があり、赤い飯でも小エビの飯であったことがわかる。罪のない一人息子の供養のために、貧乏人は西国巡礼に出かけ、子の往生を弔ったと結ばれている。

「五つの罪はよもあらず六波羅堂へ参る身なれば」の文言は、「重くとも五つの罪はよもあらず 六波羅堂へ参る身なれば」に由来するものと考えられる。西国三十三所観音霊場十七番六波羅蜜寺のご詠歌である。五逆罪には子殺しは入っていないが、父母殺しに近い罪の重みを表しているのだろうか。前話にあった「五つの罪はよもあらず」もまた、これに共通したものである。子供の年齢を五歳とするのは、「五つの罪」によっているようだ。両話は共に五歳と語られている。共通点の多さから、両話の間には伝播上の何らかの関係も推察される。

このような富める者と貧しい者とを対比させた語りは、弱者の誇りを自らの子を殺めることでしか示せなかった悲哀を感じさせる。愛媛には、伝説のような次の話が伝わっている。

#### 事例六、みつくり三四郎 (愛媛県松山市)

瀬賀居の赤岸に、とても貧しい三四郎親子四人が住んでいた。

ある日、隣の家の小豆がなくなつた。隣の家主は庄屋に訴えた。庄屋は、貧しい三四郎が盗んだに違いないといって三四郎を取り調べた。しかし、三四郎夫婦は決して覚えがないという。子供なら正直だと考えた庄屋は三四郎の子供に尋ねると「赤いままを食べた」と答えた。庄屋は、三四郎夫婦に向かって、ウソをついたと責め、

あげくの果ては、三四郎一家の首をはねて殺してしまった。

ところがよく調べてみると、この哀れな三四郎一家の食べたのは、小豆ではなく高野きびであったことがわかった。高野きびは煮ると赤くなるから、それを子供は「赤いまま」といったのであった。

その後、赤岸には夜な夜な幽霊が出没し鬼火がゆらめいた。恐れた村人たちは悲運の三四郎一家の墓を立て手厚くとむらつたところ、幽霊も鬼火も消えた。それ以来、その墓は、村人たちが、つらい悲しい思いをする時、願いごとをよくきいてくれるそうである。

(真鍋博『愛媛の昔語り』(14))

小豆がなくなり、訴えられた庄屋はその隣に住む貧しい三四郎が犯人と考える。その後の展開は前話と同じだが、庄屋は嘘をついたと責めて三四郎一家の首をはねてしまう。後に赤い飯は小豆ではなく高野きびであったことが判明し、夜ごとに幽霊や鬼火が現われるようになる。恐れた村人たちが三四郎一家の墓を立てて弔うと、怪しいものは消えて村人の願いを聞き届けてくれるようになったと語られている。墓が実在していたならば、伝説と見做せる話である。

このような「赤米と子供」の話群については、坪井洋文が赤米の民俗と儀礼の考察の中で取り上げ、富める者の非日常食と貧しい者の日常食との間に生じた色の類似による悲劇譚であると指摘している<sup>(15)</sup>。富める者の非日常的儀礼食とは、小豆を用いた赤飯や小豆飯であり、小豆はそのために用意されたものだと思われよう。本話については、赤米の歴史と関連させた花部英雄の考察もある。青森県から長崎県までの分布が確認されている<sup>(16)</sup>。

赤米の問題には触れずに小豆を主体にして考えれば、貧しい者には入手の困難なものでありながら、富める者には口にするのが許されている、それが小豆ということになる。つまり、本話における小

豆は、豊かさの象徴として語られていると理解できる<sup>17)</sup>。

### 三、「鱈男」の場合

東北地方には、小豆の効力を説く昔話が伝わっている。次にみよう。

#### 事例七、鱈男（岩手県遠野市）

むかし、気仙のある所に小さな殿様があって、一人の美しいお姫様を持っていた。そのお姫様が齢頃になると、毎夜毎夜どこからか、美男の若者が通うて来て、泊まって翌朝帰って行くのであった。

お姫様がお前様はどこのお方か、明かして下さいと頼んでも、その若者は遂に口をきいたことがなかった。そこで侍女が怪んで、ある夜小豆飯を炊いて食わすと、食いは食ったが、翌朝見ると死んでいた。それは鱈魚であった。

（佐々木喜善『聞耳草紙（18）』）

異類婚姻譚に分類される「鱈男入」である。「鱈男入」の類話は、岩手から宮城にかけての太平洋岸に分布が認められる。両県は、日本の中でも北海道に次いで鱈の漁獲量の高い地域である。美しい姫君の元へ夜毎に素性の知れない若者が通ってくる説話は、古く三輪山神話にまで遡ることができる。神と人との婚姻譚である三輪山神話を考えれば、本話の男が自らの身を明かさないのは、やはり神であるためなのだろう。本来はそうであったと理解できる。しかし、三輪山神話の流れを汲む蛇姫入の多くの昔話と同様に、本話でも男は最後に殺されることになる。

ここで注目したいのは、その方法である。怪しんだ侍女は、男に

炊いた小豆飯を食べさせる。すると翌朝男は鱈魚の姿で死んでいたとあり、男の正体を暴き死に追いやったのは、小豆飯であったことがわかる。小豆には力があると考えられていたと解される。

次に示す「大鱈の話」にも、同じような考えが窺える。筆者が大槌町で聞き得た話である。

#### 事例八、大鱈の話（岩手県上閉伊郡大槌町）

昔々、赤浜に船流れで死んだ人の奥さんがあったんだと。船で流れて死んだ人の奥さんがね。そしてその奥さんが、独りっこで毎晩寂しい思いしているようになったんだと。そして、今度は船乗りだ、船乗りだって、毎晩通う人があったんだと。そしてその人が来っ時は、戸を開ける音もなくてソコソコつと入って来て、そしてまるではてすのりに来るんだってす。

そして入る人があって、不思議なもんだねえ。戸を開ける音もなく、入ってから毎晩びしょぬれになって来んなと思ってその人が、気にしたんだと。

そして気にしてから、隣に年の取ったお婆さんがあが、この人さ行つて、何なんだか聞いて来ねばなんねと思つて聞きさ行つたんだと。そしてそのお婆さんが、

「船乗りだつて来るんだらば、小豆煮て、小豆のつゆで足を洗わせろ」つたど。夜入つて来た時ね。そうせばわかからつてことで。

奥さんが小豆煮て、その小豆のつゆ出して、「足洗つて入つて」つてそして出したんだと。そして叩いてゴタピタゴタピタつて板打つて音が聞こえたが、後はいなくなつたんだと。そしていなくなつて不思議だなあ、どこさどうなつたんだべつてまあ思つて。

そして朝起きて見たつけ、小豆のつゆがこう流れて歩つた跡があったんだと。そしてそれから小豆のつゆの歩つたところ、こう行つ

たつきや、浜辺さ行ったら大きな鰯が死んでらったんだと。鰯の化け物だったんだと、それが。それをお婆さんさ聞かせたつきや、「だっからおれはそうだと思つて聞かせてやつたんだが。海の化け物にだまされたらば、小豆を煮て、小豆のつゆに浸からせるんだよ」って教わつたんだって。だっから、年寄つた人から知らねえことはきくんだあよつて昔の人はこういうお話を教えたつたの。そういうこともあつたんだと。

(菱川晶子「小石エイ嫗の昔語り」)

―岩手県上閉伊郡大槌町の伝承⑩―(三)

前話とは打つて変わり、主人公は未亡人である。そこへ船乗りだと名乗る男が毎晩通つてくるようになる。素行に怪しさを感じた女性、隣に住む老婆に相談をする。すると、小豆を煮て小豆の汁で足を洗わせるとの助言を受ける。

女性がやってきた男にその通りにしたところ、ゴタピタと板を打つ音がするが、姿は見えなくなる。不思議に思つた女性が翌朝小豆汁の跡を辿って行くと、浜辺まで続いており、そこで大きな鰯が死んでゐるのを見つけるのである。海の化け物に騙された時には、小豆の煮汁に浸けるものと老婆は語る。

この老婆のように、語り手である小石嫗は「小豆のつゆで手足を洗わせると、海の化け物は弱い」と教えてくれる。人間も小豆を沢山食べれば胸が焼けるように、小豆には力があると語るのだ。

このように、化け物となつた鰯は退治の対象となり、その時に小豆が用いられているのがわかる。事例八のように小豆の煮汁で化け物を退散させるのは、宮城県の二例と岩手県釜石の一例になる。小豆飯も含めて、小豆の力についての理解が部分的な広がりを持つてゐるのがわかる。

#### 四、小豆の力

人々が小豆に特別な力を感じていることを示す説話は、他にも見出される。次の二話をみよう。

##### 事例九、十一月十一日に小豆飯を食べる話(長野県北佐久郡)

或る村の名主様の家に可愛い一人の男の子が出来た。この時一人の乞食が明神様の縁の下に寝て居ると、八幡様達が

「今日は名主の家で子供ができるから行つてもらひたい。」と誘ひに来た。明神様は

「俺は今日御客があつて行かれないから皆さん、よろしく頼みやす。」と言つて御願をした。暫らくすると神様達が

「行つて来やした。」

と言つて帰つて来た。明神様は

「そりや皆さん有難う。……何んでごわしたいや。」

と言ふと、八幡様達は

「男でした。」

「寿命はいくつまですいや。」

「寿命は七つまで。」

「何で死にやす?。」

「十一月十一日川流れで死ぬ。」

と、話しあつて居るのを乞食が聞いて、こりや、いいことを聞いた。

と言ふので早速名主様の家へ

来て見ると、名主様の家では、もう大喜びでお祝いをして居た。乞食はいろ／＼と御馳走になつた。

七年たつた十一月十一日。乞食は名主様の家を訪ねて、「実は七年前の今日、明神様で、かく／＼の話を聞いたのだが、子供さんはどうしやした。」と聞くと、名主様は、「子供は今日、竿を持つて川

へ魚を釣りに行つた。昼過ぎまで居て来るからと言ふからば、餅を持たせてやつた。今日は七つの十一月十一日！川で果てる？そりゃ困つた。皆さん頼む。」といふので家中の者が総出で探しに出た。

すると間もなく子供はひよつくり帰つて来たので、一同はたいへん驚いたが大安心をした。

子供の言ふに「魚を釣らうと思つて湧玉へ行くと、湧玉の中から、小僧が出て来て、『何しに来た。』と言ふから、『魚をとりに来た。』と言つた。丁度腹がすいたから背負つて行つた。ば・た・餅を出して、『おい、俺あ、おちやづけにば・た・餅をいづばい持つて来たが君にくれるぞ。いくらも有るから君うんと食べろや。』と言つて、澤山くれてやつた。すると小僧はむしやむしや食べてから、『俺ら本當の人間じゃねい。河童小僧だ。いつも人を川へ引込むんだが、今日は君にば・た・餅を沢山貰つて食べたから、君よは引込まねいぞよ。』と言つて川の中へ沈んでしまつた。それで、とてもおつかなくなつたから、今慌てて逃げて来た。』と言つた。

探しに出た人達も「そりゃば・た・餅の御蔭で命が助かつてよかつた。」と言つて喜んだ。

このば・た・餅は小豆のば・た・餅だつたので、この事が有つてからこの日に小豆飯を食べれば、決して川流れに遭ふ事は無いと言つて居る。

(北佐久教育会編『北佐久郡口碑伝説集』(20))

「運定め話」や「産神問答」に分類される昔話である。本話では八幡様が産神の役目を担っているといえる。生まれた男の子の寿命は七つまでであり、十一月十一日の川流れで死ぬ運命にあった。偶然それを耳にした乞食は、七年後のその日に名主の家へ行き、子供の運命を聞いたままに告げる。ちょうど子供は川へ魚釣りに行つて

いたために大騒ぎになるが、やがて無事に戻ってくる。出生時に定められた運命を変えたのは、小豆のば・た・餅であつた。持っていたば・た・餅を河童小僧にやつたことから、命が助かつたのである。

話はそれに加えて、十一月十一日に小豆飯を食べると川流れに合わないとも語られている。この日に小豆飯を食べる由来を説くと同時に、本話からは、小豆を食すことによって、命が守られるとの考えが読み取れる。

#### 事例十、鬼の山の旅人(岐阜県中津川市)

昔々ある時になも、山ん中の一軒屋があつたと。そこにお爺さんとお婆さんが暮しといでたげながも。それからなも、旅人が来て、『どうか今夜一夜さ泊めてくれんか』ちつたげなで、

「こんなとか(所は)泊めてやつてもものう、晩になると鬼がたあいへん来て、お前たあみたいなのは食い殺いちまうであかんで」ちゅうと、

「はいじゃあどつか、かくいてもらうとこはないだらうか」ちゅうで、  
「ほんなとこはないが、はいじゃあ二階へ上つて寝さんしよ。鬼がたあ(鬼達)が晩方に来ると、この栗をやるで」つて。ほいで栗を貰つて二階へ上つて寝とつたと。そうしたげなら鬼がたあが晩方になつたら来て、「人臭いなあ、人臭いなあ」つて来てのう、梯子を登りかけたげなで、

「そんなとこへ登るとあぶないぜ、梯子登るとあぶないぜ」つてお爺さんが下で言つたげな。それを聞いたつて、旅人は二階でバチンと栗を割つたげな。そしたら鬼はおそががつて逃げて行つてしまつたげな。それから、

「こんな山ん中の奥山へ入つてきやあ、お前が一夜さずつと行かしたとて、ひとや(人家のある所)へは出れん。この小豆を一升やる



で、この小豆を持ってって、山で寝たら小豆を寝た畔にずうっと撒いて寝さんしょ」って宿のお爺さんがおくれたげなで、それを貰ってって、夜になるまでに行けんげなむんで山で寝たって。小豆を撒いて。そうしたら鬼んたあが、

「人臭いなあ、人臭いなあ」って来てなも、

「ここにおるけど蛆がわいとるわ」ちって、小豆が撒いたるもんでのう、

「蛆がわいとるわ」ちって、かまわんこなおいてつちまったと。そいでお爺さんが心配して、

「どうやしらん、どこで泊まりたらあ、どこらへんで泊まったか、おらあーぺん行って見てくるわ」てって行ってみると、そう遠くでもなかったかしらん、旅人がおってなも、

「おかげさんで、小豆を撒いて寝たら、『ここにおるけど蛆がわいとるわい、ここにおるけど蛆がわいとるわい』って、鬼がたあ喋って行っちゃった。ありがたかった」ちって、旅人が言わしたって。

〔『全国昔話集成二五 恵那昔話集(21)』〕

逃竄譚に分類できる昔話である。内容は、部分的に「鬼の子小綱」に近いものがある。

山中で宿を乞うた旅人は、鬼の家に匿ってもらうことになる。親切な爺の機転で旅人は鬼に見つからずにすむが、その家から里へは一日では辿り着けない。そのため山で寝る時にはまわりに小豆を撒いておけとの助言を受け、小豆を持たせてもらう。鬼は人間の臭いを感じて近くまで来るが、旅人を食うことはなかった。体のまわりに撒かれた小豆を見て、蛆がわいていると言って去ったのだった。このように本話からは、小豆は山中の鬼の難を退けることができる人と人々に考えられていたのがわかる。

## まとめ

昔話の中の小豆を読み解いていくと、人々の生活の一端が浮かび上がってきた。小豆は日常的にいつでも口にできるものではなく、ハレの日や節目の時に料理される食べ物であった。このためハレの日、また神迎えの前の緊張感を反映したかのような、「小豆洗い」といった妖怪が生み出されていた。小豆を水で洗う時に聞かれるシャキシヤキといった音の響きも、人々の印象に強く残っていると考えられる。しかしまた、小豆は誰でもが簡単に食べられるものではなかったようだ。「赤米と子供」からは、小豆を盗んだ疑いかけられた人々の、虐げられる様子が語られていた。同じ赤い飯でも、それは小豆によるものではなかった。貧しいものは容易に食べることもできない、豊かさの象徴としての小豆がそこにはあった。

「鱈智入」の昔話では、海の化け物である鱈を退治するために小豆が使われていた。本来は神であったものが海の化け物となったか、神から零落した蛇が身近な鱈にすり替わったのかは定かではないが、人間から遠ざけるべき存在となった異類の正体を暴き、殺めるために小豆飯や小豆の煮汁が使われていた。小豆にはその力があると考えられていたことがわかった。

そのような小豆の力を説いていたのがまた、「十一月十一日に小豆飯を食べる話」や「鬼の山の旅人」であった。川流れにあう運命であった子供を、小豆を使ったぼた餅が救い、十一月十一日には小豆飯を食べることが説かれている。また山の鬼から人間の命を守ったのも、小豆だった。鬼のような強力なものでさえも、小豆にはその力を弱める効力があると人々は考えていたのである。

このようにみえてくると、小豆は海の難や川の難、また山の難から人間を守ってくれるものと理解されていたことがわかる。人々の周りを取り巻く自然界は、人力の及ばない世界であり、かつては今以



上に自然に対しての畏怖心が強く持たれていたと考えられる。その自然界のすべての危難から、小豆は守ってくれると人々は語り伝えていたのである。なぜであろうか。その理由は、小豆の赤い色に大きく関わってくると考えられるが、それについては次回の民俗儀礼の考察の中で探っていくことにする。

## 註

- (1) 盛永俊太郎編『稲の日本史』（農林協会、一九五五）一八九～一九〇頁。
- (2) 坪井洋文「稲作文化の多元性―赤米の民俗と儀礼―」（『日本民俗文化体系―風土と文化―日本列島の位相』）小学館、一九八六、二九六～三四〇頁。
- (3) 田辺久子「小豆の民俗」（『日本民俗学会報』第二八号（日本民俗学会、一九六三）三三～四二頁）。
- (4) 田中瑩「伝承怪異譚」（三弥井書店、二〇一〇）一八九頁。本書のタイトルでは、「小豆とき（小豆撒き・小豆洗い）でまとめられていたため、各説話の内容によるタイトルを採用した。
- (5) 同書、一八八・一八九頁。
- (6) 遠野民話同好会編『遠野の昔話』（日本放送出版協会、一九七五）四二頁。
- (7) 多田克己編『竹原春泉 絵本百物語―桃山人夜話―』（国書刊行会、一九九七）一〇〇頁。
- (8) 東洋大学民俗研究会編・刊「中尾と平の民俗―群馬県北群馬郡小野上村上地区―」（昭和六三年度号一九八九）一二二頁。
- (9) 井之口章次「妖怪と信仰」（『日本民俗学会報』第三四号（日本民俗学会、一九六四）五～六頁）。
- (10) 関敬吾編『日本昔話大成』第一〇巻（角川書店、一九八〇）三三四～三三六頁。
- (11) 稲田浩二他編『日本昔話事典』（弘文堂、一九七七）。
- (12) 鈴木暹編『伊豆昔話集』（岩崎美術社、一九七九）一三〇頁。
- (13) 小山真夫『小県郡民譚集』（郷土研究社、一九三三）二五頁。
- (14) 真鍋博『愛媛の昔語り』（朝日出版、一九六〇）一二二頁。
- (15) 前掲書註（2）に同じ。
- (16) 花部英雄「昔話『赤米の悲劇』の解説」（『國學院雑誌』第一〇〇巻第六号 國學院大學、一九九九）一～一三頁。

- (17) 小豆の生産者や水田の乏しい地帯では、米等と一緒に小豆を混ぜてかて飯にして食べるように、日常の食べ物の中に小豆を使うことがある（「学際討論『赤米の文化史』（京都大学人類学研究会編『季刊人類学』一四巻四号 社会思想社、一九八三）四十五頁。本話の伝承地は水田地帯には限定できないため、この点は矛盾が見られるが、説話の内容に即して考えれば、富める者の小豆として理解できる。
- (18) 佐々木喜善『聞耳草紙』（筑摩書房、一九九三）三二四頁。なお、本書は同書名で一九六四年に刊行されたものの文庫版になる。
- (19) 菱川晶子「小石エイ子の昔語り―岩手県上閉伊郡大槌町の伝承―」（『一般教育論集』四二号 愛知大学 一般教育研究室、二〇一二）九二～九三頁。
- (20) 北佐久教育会編『北佐久郡口碑伝説集』（信濃毎日新聞、一九三四）四一八頁。引用に当たっては、文中の二は一部を除いてに改めた。
- (21) 『全国昔話集成二五 恵那昔話集』（岩崎美術社、一九七七）二九九頁。